

- 集落住民数の激減により、集落の機能維持が困難な状況にある中、もう一度自分たちにできることを見直そうという信念の下、平成24年度より鳥獣被害対策を軸とした集落ぐるみの取組を開始。
- 専門家による指導の下、集落一丸となり、緩衝帯の整備や放任果樹の除去、侵入防止柵をブロックに分けて設置し、鳥獣被害の撲滅を実現。結果、中山間地域集落のモデルとして、平成27年度鳥獣被害対策優良活動表彰を受賞（農林水産大臣賞）。

あさぎり町(松尾集落)の課題

あさぎり町は、熊本県の南部、球磨盆地の中央に位置。松尾集落は標高350m、集落の四方を山林で囲まれ、最大傾斜度18.4°という厳しい条件にある中、20年前頃からシカ、サルによる農作物の被害が顕著になり、収穫量が減少するなど、営農に大きな影響。

○ 集落住民数の激減

入植当時8戸だったが、半数以下に減少。鳥獣被害対策だけでなく、集落の機能維持も課題。【高齢化率50%】

○ 電気柵を設置したが・・・

数年前に集落全体を囲うように電気柵を設置したが、管理が行き届かず、集落内に獣類が侵入。

せっかく電気柵で囲ったのに！！



取組活動

集落の地理的環境に適応し確実な開閉が可能な効果の高い侵入防止柵の設置方法を検討・実践。

放任果樹の除去、藪・雑木林の刈払いなど、野生鳥獣を寄せ付けない集落づくりの取組を、全住民が自らの農地において実践。

○ 侵入防止柵の設置・管理

- ①柵を設置する前に管理の方法について検討。
- ②集落全体を囲うのではなく、小規模でも確実に閉鎖できるブロック分けを行い、守るべき農地のみ設置。
- ③各ブロックに管理者を決め、顔写真付きで掲示して柵の定期点検を実施。



被害額（あさぎり町）

4,572千円（H24）→1,846千円（H29） ※松尾集落の被害額は、ほぼ0（H29）。

取組の効果

かつて民家から離れた山林付近ではクリの収穫が皆無となるなど深刻であった鳥獣被害の撲滅を実現。

○ 活動の定着化

柵の管理は自分たちで行うという意識が継続。

○ 生産活動の活性化

鳥獣被害により荒れ果てていたクリ園をもう一度やり直そうという住民の営農意欲が高まり、改植総面積は5haに拡大。

○ 人材育成

被害対策の積極的な視察の受入や事例発表を行い、近隣や県内のリーダー育成に貢献。



視察受入の様子

県単独事業を活用し、専門家による講演や集落点検を行った。放任果樹の伐採など、集落環境改善の重要性を学ぶ。

きっかけ

集落の人口が激減し、鳥獣被害も相まって集落の元気がない。

Step1（～H23）

電気柵の設置

- 集落全体を囲うように電気柵を設置
- しかし、管理がうまくできず、効果も薄れてしまった（集落人口に対して管理する延長が長すぎた）。

Step2（H24）

限られた人でできることを検討

- 電気柵の失敗から、管理の大変さを学ぶ（柵を設置して初めて、管理の大変さに気づく）。柵は設置してからが本番。
- 集落全員で、限られた人でできることはないか考える。

Step3（H24）

計画の策定

- 専門家による鳥獣被害軽減対策に関する検討会を重ねて開催。
- 集落住民の意識の高まり
- 柵は確実に閉鎖できるようブロック分け。

鳥獣被害対策実践のリーダー

遠山好勝氏

鳥獣被害に対する危機感をいち早く感じとり、集落をまとめ、対策することに成功。成功事例を基に、近隣集落や県内のリーダーの育成活動にも貢献。



急斜面も柵周辺の刈払いを実施

Step4（H24～H27）

集落全員で柵を設置

- 資材の購入は補助を受け、設置は集落の全員で実施。
- 柵の管理者を明確に定め、柵に顔写真入りの管理者票を掲示
- 管理者であるという責任感

Step5（H27～）

管理の継続

- 柵設置時に設定した管理者により、管理は自発的・継続して行われている。
- 柵周辺の刈り払いもしっかり行われており、非常に効果の高い状態で維持されている。
- 高い効果の発揮

取組を経て…

取組に当たっての秘訣

- 柵の管理者を明確に定め、柵に顔写真入りの管理者票を掲示。
- 集落全てを囲うのではなく、管理できる規模感を見極めることが大切。あまり広範囲に柵を張り巡らすと、管理が行き届かず、弱点ができてしまう。

将来に向けて

- 特産物を活かした6次産業化や農泊を視野に。
- 目標は「有害鳥獣対策日本一」。実績を積み重ね、全国各地の自治体から研修等の受け入れを目指す。